

令和六年度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ 「〇〇字で」、または「〇〇字以内で」、という指示がある場合は、「。」「、」「  
「かっこ」なども一字と数えます。

— 1 —  
次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ふいに思った。

※  
ぎくろを食べたときの感覚には覚えがある。

最初のひとくちはおいしくて、なんて素晴らしい体験なのだと思う。それが大好きになる。だが、その次からは感動が薄れ、反対に種のやつかいさだけが主張しはじめる。

もうそうになると、最初の幸福感は戻ってこない。

種を取り①ノゾくのも面倒で、そのまま呑み込むのも喉に詰まる。

四苦八苦しているうちに、最初の感動など消えてしまうのだ。

大学に入れたこともそうだし、アルバイトをして自分でお金を稼げるようになったこと、そして留学が決まったことも、ここにきて、ここで勉強していることも。

今は種だけをがりと噛んでいるような気分なのだ。

理屈では、ここで学べていることが幸せで、恵まれているのだということもわかっている。もちろん自分でお金を貯めたけれど、結局母からも助けてもらっている。そもそも大学の学費は全部母が出してくれているわけだし、大学が交換留学を募っていないければ、自力で留学することは難しい。

なのに、常にそれに感謝し続けることは簡単ではない。恵まれた環境も、すぐに日常に変わってしまう。しかも常に課題と異文化との衝突に直面している身としては。

(1) なぜ、あんなに激しい衝動に駆られて、日本を出たいと考えたか、今になってしまえばわからない。勉強だって頑張っているけど、つくづくのがやっただ。

お金と時間を費やした分、なにかが得られているのだろうか、と不安で仕方がない。  
昨日買ったぎくろは、冷蔵庫で少しずつ乾いていく。

その翌日のことだった。

寮から学校に向かう道には大きな公園があり、いつも老人や子供が太陽をアビている。夜は、静かすぎて不安になるから大通りを歩くが、朝や昼は公園を突っ切って歩いた方が気分がいい。

その日も春菜は、授業に必要な本を抱えて、公園を急ぎ足で歩いていた。

ふいに、木立のそばに人だかりを見つけた。

近づいていくと、エリカの姿が見えた。彼女も春菜に気づいて手を振る。

「どうしたの？」

「あそこにフクロウがいるの」

彼女が指さした木には、たしかに真つ白なメンフクロウがいた。なにか戸惑っているような様子で、地上にいる人を見下ろしている。

「野生のフクロウ？　公園によくいるの？」

たしか、メンフクロウはアメリカやヨーロッパに生息しているはずだ。

「ううん、黒い森にはいるだろうけど、こんなところまで出てくることはないわよ。誰かのペットが逃げたんじゃないかって、みんな話している」  
たしかに春菜も公園でフクロウを見たことはない。ウサギやハリネズミは見たことがあるが。

春菜はゆつくりと近づいた。フクロウと目が合う。<sup>(2)</sup>たしかに怯えているような、困っているような顔をしていた。

すぐ近くに肉屋があることを思い出して、春菜は一度、その場を離れた。

肉屋で鶏も肉を買って、一口大に切ってもらい、もう一度公園に戻った。

うまくいくかわからない。ちょうど首に巻いていたストールを腕に巻いて、手を伸ばす。もう片方の手で鶏肉を見せた。

「おいで」

日本語で呼びかけてみる。メンフクロウは、翼をわずかに動かした。ことばが通じた気がした。

「大丈夫、怖くないよ。おいで」

もう一度呼ぶと、フクロウは羽ばたいて、春菜の腕に下りてきた。集まっていた人たちから歓声上がる。

エリカが驚きの声を上げた。

「どうしたの？ 魔術みたい！」

「そんなことないわよ。この子は、お腹が空いているの」

ベットとして飼われていた子ならば、自分で餌をとることはできない。知らない人は怖い、空腹には逆らえないのだ。フクロウは春菜の手から、鶏肉をががつと食べた。ほとんど丸呑みだ。

授業には出なければならぬが、フクロウをこのままにしておくことはできない。飼い主を探さなければならない。

春菜はエリカに言った。

「今日は学校に行けないわ。<sup>(3)</sup>この子をほつとけない」

エリカは笑ってウインクをした。

「OK。先生に話しておく」

寮に帰るまでに、怯えて逃げたのではないかと思っただが、フクロウは大人しく春菜の腕に止まっていた。とりあえず、春菜を信用することに決めたようだ。

寮に帰って、職員に説明をする。ドイツは動物に優しい国だから、怒られない気がした。春菜だって、飼いたくて連れて帰ったわけではない。預けられるところがあるのなら預けたい。

寮職員のアグネスは、電話で、市の動物を担当する部署に聞いてくれると言った。

まだ学校に行っていなかったらしいタニアが、階段を降りてきた。春菜の手に止まるフクロウを見て、目を丸くする。

「どうしたの？ その子」

公園での出来事を説明する。フクロウはすっかり安心したらしく、春菜が背中を撫でてやるとうっとりとした顔をしている。

「フクロウ、飼ってたことあるの？」

「飼ってたことはないけど、家にいたことはある」

「どういふこと？」

聞き返されて、春菜は苦笑した。説明すると長くなる。

家にいたメンフクロウは「月」という名前だった。月のようにまん丸の顔をしていたからだ。いや、春菜のフクロウだったわけではないから、母と春菜が月と呼んでいただけだ。

この子と同じように、どこかで飼われていたのが迷子になったか、捨てられたかで保護され、母の働く動物病院に持ち込まれたのだという。保護した人も、とても飼うことはできず、困って動物病院に連れてきたというだけだし、※保健所でフクロウを世話できる人はいない。

仕方なく、母が家に連れて帰ってきたのだ。団地だから犬猫は禁止だが、規約にはフクロウを飼ってはいけないとは書いていない。小鳥は飼っていいから小鳥の延長だと考えることにした。そもそも、飼っているわけではなく、飼い主が引取先が見つければ、すぐに手放すと母は言っていた。

大人しく、賢い鳥だった。人に慣れていて、留守番をいやがった。普段はほとんど鳴かないのに、置いて行かれるとわかったときだけ、悲しげな声を上げるのだ。

春菜がダイニングテーブルで勉強をしていると、テーブルの上でじっとそれを見守っていた。ときどき、消しゴムなどをくちばしで転がして遊んだ。

母が新聞を読んでいると、くちばしで新聞をめくろうとした。手伝っているつもりだったのだろうか。

家にいたのは、たった二ヶ月だ。欲しいという人が見つかって、月はその人にもらわれていった。

そんなことは一度だけではない。家に子猫がいたときもあった。動物病院に持ち込まれた子猫で、昼間は母が動物病院で面倒を見、夜だけ家に連れて帰ってきた。死んでしまった子もいるし、元気に育ってもらわれていった子もいた。

そんな生活で春菜は知った。野生ではない、人に管理された動物たちの命を繋ぐのは、人の責任なのだ。

もちろん、できなければ無理をせず人にまかせたり、はじめから手を出さないことも必要だが、手を尽くさなければ弱って死んでしまう命ならば、できる限りのことはしたい。

家にいたフクロウには、鶏肉だけではなく冷凍マウスなどもやっていたが、当座の食料ならば鶏肉で充分だろう。

「母が獣医だったから、迷子のフクロウを世話していたことがあるの」  
そう言うのと、タニアは納得したようだった。

タニアと話していると、アグネスが電話を切って戻ってきた。

「動物保護施設<sup>しせう</sup>がフクロウも受け入れてくれるそうよ。でも、とりあえず、フクロウの迷子の届けが出ていないか、調べて折り返し連絡<sup>れんらく</sup>くれるって」

それを聞いてほっとした。

さすがに長期間、フクロウを寮で飼うのは難しいだろう。それに春菜は来年の春には日本に戻ってしまう。

メンフクロウは、春菜の腕から、近くにある椅子<sup>いす</sup>に飛び移った。テーブルののったりして、寮を探検しはじめている。少しリラックスしてきたということなのだろう。外よりも寮に連れて帰った後の方が安心してるところを見ると、やはり室内で飼われている子なのだろう。

だが、寮の学生の中には、フクロウが怖い人もいるかもしれない。

「こっちにおいで」

声をかけると、フクロウはまた春菜の腕まで飛んできた。信用されたようであれしくなる。

「わたしの部屋に連れて行くから、なにかあったら部屋に連絡して」

階段を上がる間も、フクロウは素直に春菜の腕に止まっていた。

気づかぬうちに、心の中で「月」と呼びかけていた。

月がいたのは、もう四年も前のことから、細かい特徴<sup>しちゆう</sup>などはすっかり忘れている。この子と月が同じフクロウのように思えてくる。

もちろん、そんなことがあるはずはない。東京ならば百分の一くらいの確率であるかもしれないが、ここは遠く離れた異国だ。春菜と月が再会できる確率は、何万分の一か何億分の一かもしれない。

分厚い本の中からたったひとつの文字を探し当てるようなものだ。<sup>(4)</sup>Aはすべて同じAに見えるのに、その中からたったひとつのAを探し当てなくてはならない。

そんなことがありえるはずはない。

部屋のドアを<sup>③</sup>シめると、フクロウは羽ばたいて、春菜のスーツケースの上に止まった。

伯母<sup>おば</sup>の形見だというが、本当に伯母が使っていたものかどうかはわからない。

母は、親戚<sup>しんせき</sup>が適当に伯母の家にあったいらぬものを押しつけたのだ、と言っていた。それにも一理あると思う。伯母は旅行などしない人だっ

たから。

だが、そんなことはどうでもいい。

伯母が持っていたもので、それを見るたび、伯母を思い出すことができればそれでいいのだと思う。形見は生きた人が、もういない人を思い出すためのものなのだから。

フクロウは、スーツケースの上に止まったまま、ベッドに座る春菜を見て、首をかしげた。

月も同じ仕草をよくした。聞き慣れない音を聞いたときなどに、首を大きく曲げるのだ。

「ねえ、月、わたし、あんたに会うため、ここにきたのかなあ」

自然に口から出たことばだった。そんなわけないと思いつつ、そうあってほしいと思う。

フクロウが止まっていた腕には小さなミミズ腫れがたくさんできていたが、それはたいしたことではない。

フクロウはまた首をかしげた。

もしかすると日本語を聞くのをはじめてなのかもしれない。

部屋のドアがノックされた。春菜は立ち上がってドアを開けた。アグネスだった。

「飼い主が探しているらしいわ。これからすぐここにくるって」

現れたのは四十代ほどの茶色い髪かみの女性だった。ブリジットと名乗った彼女は、※もとうきん猛禽類もうきんを使ったショーなどを行っていると言った。彼女は、フクロウを見ると目を輝かがやかせた。

「よかった。本当は三日前に帰るはずだったんだけど、この子を探すために残っていたの」

ベルギーのгентからショーのためにやってきたという。

「保護してくれて本当にありがとう。迷子になって、見つからなかったらどうしようかと本当に心配してたの。この子はわたしの娘むすめみたいなものだから」

あまり強い感情を表には出さないが、声には愛情が籠こもっていた。

「チキンを少しやりました」

「フクロウを飼ってたことあるの？」

ブリジットに尋ねられて、春菜は答えた。

「少しだけ。母が獣医だから、迷子の子がしばらく家にいたんです」

それを聞いて、ブリジットは納得したように笑った。

「よかったわ。あなたのような人に見つけてもらって」

メンフクロウは、明らかにブリジットに甘えていた。ブリジットの服をくちばしでひっぱったり、<sup>てのひら</sup>掌に頭をすりつけたりしている。

「懐いてるんですね」

「ええ、わたしが雛のときから餌をやって育てたの」

だとしたら、この子は月ではない。そんなことはわかっていたはずなのに、急に寂しい気持ちになる。

(5) 寂しさを振り払うために、尋ねた。

「ショーって、どんなショーをやるんですか？」

「いろいろあるけど、たとえば、結婚式で、この子が指輪を届けるの」

「そんなことできるんですか？」

「ええ、とても賢いのよ」

フクロウが賢いことはよく知っている。だが、そんな芸のようなことまでするのは見たことがない。

「庭園の※ガゼボや、教会の前で、花嫁が手を伸ばして待っているところに、この子が足に指輪の袋をくくりつけて届けるのよ。ロマンティックでしょう」

「ええ、本当に」

自分が結婚することがあるのかはわからないが、そんな式なら参列するだけでも楽しそうだ。

「そのときに逃げたんですか？」

春菜がそう尋ねると、ブリジットは首を横に振った。

「違うわ。ショーや結婚式があるときは、この子たちの餌をセーブするの。体重を普段より落として、空腹状態を保つの。そうしておけば絶対に

逃げない。この子はきちんとショーをやり遂げたら、餌をもらえることを知っているから」

そして雛の頃から人に育てられたフクロウは、自分で狩りはできない。空腹を自分で満たすことはできない。

「でも、この前のショーが終わって、しばらくはこの子を使う仕事が無かったから、充分に食べさせてしまったの。そのときに、自分で※ケージを開けて逃げ出してしまっ……」

空腹ならば逃げようとは考えない。だが、満腹になったとき、この子は急に空の広さに気づいたのだろうか。

器用なくちばしで、ケージをこじ開けて、空に向かって羽ばたいた。

なぜか急に④ムネが痛くなる。自分だ、と思った。

春菜は満たされていた。

父と母は離婚したけれど、父からも母からも愛されていた。そして伯母からも。

好きな本があつて、好きな本について勉強ができていた。どこか世界と折り合いが悪いとは思っていたけれど、だからといって追い詰められたり、迫害されたわけではない。

友達とは、少し距離があつたけれども、その距離は春菜の望んだものでもあった。彼女たちはそれでも春菜の友達でいてくれた。

だから、自分はあるなにも衝動的に、日本から飛び出したくなつたのかもしれない。

遠い空がまぶしく見えて、どこまでも飛んでいきたいくなつた。

フクロウはブリジットに会えて、うれしそうだった。抵抗ひとつせず、ケージの中におさまった。彼女も自分のいる世界が嫌で、逃げ出したわけではないのだ。

玄関まで送ってから、春菜はブリジットに尋ねた。

「この子の名前を教えてくださいますか？」

ブリジットは頷いた。

「※ルナ、と言うのよ」

「月のように丸い顔をしているから？」

ブリジットは笑って、※ヤーと言った。

単なる偶然だということはわかってる。だが、運命だと思った。

(近藤史恵『スーツケースの半分は』より)

※ぎくろ……ここではぎくろの果実のこと。一つの果実の中に赤い粒<sup>つぶ</sup>がたくさん入っていて、これを食べることができる。粒の一つずつに種が含まれている。

※保健所……公衆衛生を守るためにつくられた公的機関。

※猛禽類……フクロウ・ワシ・タカなどのように、鋭<sup>すま</sup>いくちばしとつめを持ち、他の動物をつかまえる習性のある鳥の総称<sup>そうしやう</sup>。

※ガゼボ……見晴らしのいい小さな建物。

※ケージ……鳥かご。

※ルナ……ローマ神話における月の女神。「ルナ」という名前は「月」を意味するラテン語が由来とされる。

※ヤー……ここでは「はい、そうです」という意味を表す。

問一——線①④のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画<sup>す</sup>つていねいに書くこと。

問二——線①「なぜ、あんなに激しい衝動に駆られて、日本を出たいと考えたか、今になってしまえばわからない」とありますが、本文全体をふまえた時、春菜が「日本を出たいと考えた」のはなぜだったと考えられますか。五十一字以上六十字以内で説明しなさい。

問三——線②「たしかに怯えているような、困っているような顔をしていた」とありますが、フクロウが「怯えているような、困っているような顔」をしているように春菜に見えたのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア フクロウが、人にもうべきことがあるなか、知らない人に近づくことができないでいると春菜が考えたから。

イ フクロウが、空腹であるにもかかわらず、餌として捕<sup>と</sup>るべき獲物<sup>えもの</sup>を独力では見つけられないでいると春菜が考えたから。

ウ フクロウが、生まれて初めて、多数の、フクロウとは異質な生き物と対面することになっていると春菜が考えたから。

エ フクロウが、その場を逃げ出したいのに、人に飼われていたせいで、遠くまで飛ぶ力を失っていると春菜が考えたから。  
オ フクロウが、かつていた場所に戻ろうとするなか、戻るべき場所を探し出すことができないでいると春菜が考えたから。

#### 問四

——線(3)「この子をほっとけない」とありますが、春菜がそう言ったのはなぜだと考えられますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 周囲にフクロウを扱うことができる人がいないと予想した春菜は、フクロウを育て上げた経験のある自分が対応するしかない<sup>かぐん</sup>と覚悟したから。

イ 人が育てた動物に対しては人が責任を持つべきだと考える春菜は、野生ではなさそうなフクロウを置き去りにすべきではないと判断したから。

ウ 動物病院で働く母のもとで育ち、すべての動物に対して優しく接する春菜は、困った状況にあるフクロウを見捨ててはいけな<sup>い</sup>と感じたから。

エ 鶏肉を食べた後、自分を信用するような態度を取るフクロウを目の当たりにした春菜は、引き取り手が出ない場合は自分で飼おうと考えたから。

オ かつて家で面倒を見たフクロウと似ている点があることがわかった春菜は、運命のようなものを感じ、まずは寮に連れて行こうと考えたから。

問五——線(4)「Aはすべて同じAに見えるのに、その中からたったひとつのAを探し当てなくてはならない」とありますが、ここではどういうことを表していますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 留学先の公園でたまたま出会ったフクロウの姿や仕草の中から、「月」の面影を探さなくてはならないということ。  
イ 世界中に何種類も生息するフクロウの中から、「月」と同じ種類のフクロウを区別しなくてはならないということ。  
ウ 「月」を始めとする多数のフクロウを観察する中から、フクロウならではの特徴を発見しなくてはならないということ。  
エ 人からすれば区別しにくい膨大な数のフクロウの中から、他ならぬ「月」を見つけ出さなくてはならないということ。  
オ どのフクロウも「月」のように感じられる錯覚の中から、「月」の特別さを再認識しなくてはならないということ。

問六——線(5)「寂しさを振り払うために、尋ねた」とありますが、この場面における春菜についての説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア フクロウが自分よりも飼い主に甘えるような態度を取ることから感じた嫉妬のような感情を薄めようと、春菜は、飼い主の話を深めるような質問をした。  
イ 公園で保護したフクロウが「月」である可能性にすがりたい気持ちを消し去ろうと、春菜は、フクロウが「月」ではないことを裏付ける事実を求めた。  
ウ 自分よりもフクロウの扱いに慣れていそうな年上の女性に出会ったことで痛感した自分の未熟さを一時的に忘れようと、春菜は、ショーの詳細を聞いた。  
エ 「月」と自分よりも、フクロウと飼い主の方が強い愛情で結ばれていることを知った屈辱感をこまかそうと、春菜は、愛情が育まれた過程を聞いた。  
オ 目の前にいるフクロウが「月」ではないということが判然としたことで生まれた喪失感をまぎらわそうと、春菜は、話題をそらすような発言をした。

問七 本文に登場する人物についての説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 春菜と同じ学校に通っているエリカは、公園に迷い込んだフクロウに対する春菜の見事な対応に感心し、春菜がフクロウの世話のために学校を休むことを口にする、素直にそれを受け入れた。

イ 寮職員のアグネスは、公園にいたというフクロウを春菜が突然寮に連れて帰って来た際、市の動物を担当する部署に直ちに連絡を取り、フクロウの飼い主を見つけ出すことに積極的に貢献した。

ウ 春菜の母は、獣医として動物病院で働いており、これまでも何度か、迷子になったり捨てられたりして行き場のなくなった動物を引き受け、昼は動物病院で、夜は家で、当面の世話をした。

エ 春菜の伯母は、生前さまざまな土地に旅行に出かけた行動派であり、死後、くわしい経緯はわからないものの、愛用したスーツケースが姪である春菜の留学先に持って行かれることになった。

オ フクロウの飼い主であるブリジットは、猛禽類を使ったショーを行っており、行方不明だったフクロウに再会すると、雛の時から娘のように育ててきたというフクロウに対する愛情を口にした。

問八 次のア～オは、この作品を読んだ生徒たちの感想です。作品の解釈<sup>かいしゃく</sup>として明らかな間違いを含むものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 冒頭の場面で、春菜が、留学先で悩んでいる自分の状況を口に含んだぎくろに重ねるのが印象に残った。自分が以前ぎくろを食べた時のことを思い出すと、一つの果実にたくさんの粒が詰まっていたので、春菜はたくさんの粒を食べることで同じ気持ちを味わうことが一度ならずあったかもしれないと考えた。

イ タニアという登場人物が、春菜が連れて来たフクロウを見て「目を丸くする」様子が、それこそフクロウの外見と重なるようだった。そう考えると、春菜が、フクロウの世話をした経験があることをそんなタニアに話すのも面白かった。それにしても、タニアはどうして学校に行っていないかったのだろう？

ウ 寮に連れて帰ったフクロウに、心の中で「月」と呼びかける春菜のことを考えた。理屈では目の前のフクロウが「月」ではないことはわかって、春菜は、そのことをすんなりとは受け入れられないようだった。そうした気持ちをふまえると、最後の一文に「運命」という語が使われることにも納得できた。

エ 春菜は日本を飛び出す時に「どこまでも飛んでいきたくなった」らしいけれど、その後の様子を考えると、留学先で偶然<sup>ぐうぜん</sup>出会ったフクロウに「月」の面影を見るなど、ふたたび日本に引かれているように受け取れた。春菜はどこに行ってもその世界を嫌だと感じてしまう癖<sup>くせ</sup>があるのだろうかと思像した。

オ ルナは限られた場所を飼い主によって飛ばされていたのに対し、春菜は遠くの場所まで自分の意志で行ったので、その意味では、対照的に描かれているようだった。ただ、留学先で不安そうな春菜のことを考えると、自分で望んだ場所に行ったからといって必ずしも幸せになるとは限らないと思った。

## 二

次の文章は、現代における新たな「大きな物語」を構想したものです。なお、ここで言う「大きな物語」とは、社会全体で共有される、それを追求すると幸福になれると信じられる思想で、人々が生きていく中で選択をするときの指針となるものです。これを読んで後の問いに答えなさい。

(1) 現代の大きな物語を考える上でまず認識しておくべきなのが、こうしたテクノロジーの進展によって人類は生きるための労働から解放され得るということである。産業革命によって無限の物理的エネルギーを獲得したことによって、高層ビルを建てたり、巨大タンカーで大量の物資を運んだり、日本とアメリカの間を10時間のフライトで移動できるようになった。生産性、効率性という観点では少なくとも100倍以上、あるいは無限大に向上したわけである。

それと同様に、これからAIが発達しどんどん経済活動に利用されるようになると、大半の情報処理業務の生産性は少なくとも100倍とか数千倍、数万倍になる。言い換えれば、それまで100人でやっていた仕事がたった1人でできるようになるということだ。先に紹介したように、証券会社では600人でやっていた株式のトレーディング業務にAIを導入することによってたった2人で業務を遂行できるようになったというような事例も既に多々出て来ている。

このように人間が肉体労働からも知的労働からも解放されると、言い換えるなら現在人々が消費している財やサービスのほとんどをロボットとAIが人間に代わって生産してくれるようになり、そして合理的な再分配の仕組みが整えられれば、人間はほとんど働かなくても現行の生活水準は※享受できるようになる。AIをいかに実用化していくとか、AIの活用によって産出された財・サービスを再分配するための制度をどのようにして実現するかといった課題はあるものの、AIが持つ圧倒的な生産力向上の※ポテンシャルはそうした現実的課題を乗り越えていけるだけの必然性を持つ。それらの課題が解決されて、人々が働かなくても生活できるような状況になった時、人間はどうすればより豊かに生活し、より幸福な人生を送ることができるのかを描き出すことが、これからの時代の大きな物語の核心となるだろう。

人間の営為を「目的」と「手段」に分けて、人間の幸福を探究した(2)アリストテレスの教えが一つの参考になろう。人間の営為の大半は何らかの目的を達成するための手段として行われているが、アリストテレスはある営為を行うこと自体が何かのための手段ではなく究極の目的であるような(3)エウダイモニア(幸福の行為)があるとした。そして、エウダイモニアは真・善・美を生み出すことであると※喝破した。真は真理の追究に

関すること、善は人の為、世の為になる善行、美は美しいものの創作である。エウダイモニアとしての真善美は、儲けるために新しい発見をしよ  
うとか、選挙運動でアピールするために社会奉仕活動をしよとか、展覧会で賞を獲得するために大作の絵を描こうといった、何かを得るための手段  
としての行為ではない。その行為、その活動をするこゝと自体によつて、自己充足感や幸福感を得られるような究極の目的としての真善美である。

古代ギリシアにおいては、人々が生きるために必要な物資は奴隷労働によつて生産されていた。市民は生きるための労働からは解放されていた  
のである。この点が、これからわれわれ現代人が享受し得るであろう生きるための労働から解放されるという大きな前提条件が共通していること  
になる。その意味で、アリストテレスが提起したエウダイモニアとしての真善美の追求こそ、労働から解放された人間を豊かに幸せにする営為で  
あるという考えは大いに参考になると考えられる。

アリストテレスが提起したエウダイモニアの概念と真善美を追求する行為の価値は、その※普遍性の故に暗い中世に明るい光を灯す役割を果た  
した。

教会への信頼が崩壊し、神の權威が揺らぎ始めていた中世の終盤14世紀に、イタリアではルネサンス運動が勃興した。ルネサンスは、知的活  
動や創作活動まで神の思召しと神の摂理に制約されてきた反動として湧き起つた、人間らしさを尊重・賛美した文芸・芸術の復興活動である。  
そのためルネサンスはキリスト教が世の中を一元的に支配する前のアリストテレスが生きた古代ギリシアに尊重された真善美を復興させようとする  
思想を持っていた。中世において絵画や彫刻は神や天使、あるいは聖書のシーンを描きたいいわゆる宗教画しか許されなかったが、生身の人間  
を描いた作品が登場し、称賛された。ダ・ヴィンチが描いた商人の妻の肖像画「モナ・リザ」が代表作である。またラファエロは「アテナイの  
学堂」という作品でプラトンやアリストテレスといった古代ギリシアの哲学者・科学者を描いたが、これは古代ギリシアの真善美に対する①ケイ  
イを表したものである。

このようにそれまでの宗教画にはなかった人間の活き活きとした姿をモチーフにした作品が次々に創作されるようになり、芸術の概念や社会に  
おける位置づけも変化した。そうした人間性を尊重した動きは絵画の分野だけでなく、様々な文芸・芸術の分野にも伝播して行つた。人間の生々  
しい生活が書かれた小説が出され、メロデーや和音が豊かな音楽が登場し、文化・芸術の分野は中世時代とはうって変わって華やき、活況を呈  
した。

このルネサンス運動が示しているのは、神による支配と抑圧に対する※アンチテーゼとして人々が希求し回歸する対象は、必然的に人間性、人  
間らしきになるということである。この必然性をもつて考えると、資本が神のごとく君臨し、全てが経済合理性で評価・判断されている現在も、

人々が回帰すべきは、経済合理性から離れ、人間らしきや人間性に調和するものとなるであろう。そしてそれは、それを行うこと自体が喜びや尊厳を与えてくれるエウダイモニア的な真善美の性格を持つものとなるだろう。これから描かれるべき新しい大きな物語には<sup>(4)</sup>第二のルネサンス的な人間性を尊重した価値観が求められることになる。現在、労働者としても消費者としても、両方の面で資本が儲けるための手段にされてしまっている人々が、これからの時代にまず求めるべきなのは人間らしさへの回帰である。

新しい大きな物語を構想する上で、真善美から成るエウダイモニアと並んで、もう一つ参考にすべき概念がある。歴史学者ホイジンガによる「ホモ・ルーデンス」という人間の定義である。

※本章の冒頭で人間は「ホモ・サピエンス」賢い人であるという生物学者リンネによる人間の定義を紹介したが、ホイジンガによる「ホモ・ルーデンス」は「遊ぶ人」という意味である。ホイジンガは、人間の人間たる所以、即ち人間と動物の違いは遊びをするか／しないかにあると定義した。

動物は生き延びるための活動しかしない。ライオンが獲物を狩るのも、白鳥がシベリアから北海道に渡って来るのも、生存のための活動である。餌を捕ることと繁殖するための活動以外は基本的には何もしない。無駄なエネルギーを使わないためである。ライオンやイヌが生まれてからしばらくの間は兄弟でじゃれ合って遊んでいるように見えるが、これは親が餌を与えてくれる短い幼児期の間だけのことであり、しかも狩りのための体づくりと技術習得のトレーニングである。動物は成獣化してからは遊びはしない。遊びに無駄なエネルギーを使うと、そのエネルギーのためにより多くの餌をとる必要性が生じたり、天敵に見つかる原因になったりして、生き延びる確率を減らしてしまうからである。

一方、人間は子供の時はもちろん、大人になってからも遊ぶ。週末のゴルフや釣りといった趣味のために平日の仕事を頑張っているという人も多い。ライオンは子供の時に狩りの技術を習得するためにじゃれたり遊んだりするが、人間は大人になっても遊ぶために働いていることも少なくないのである。こうした事実を見ても、人間が人間らしくあるための要素として遊びは欠かせない。ホモ・ルーデンスという人間の定義は、ホモ・サピエンスと同様に人間の本質を的確に表していると考えて間違いないだろう。

ホイジンガは動物と人間の最も重要な違いを遊びをするかしないかに見出し、人間の本質は遊びにあるとしたが、遊びから生まれるものが文化と交流である。遊びの中から生まれる文化と交流が人間を楽しませ、生活を豊かにし、人間らしさを形成するのである。

遊びから生まれる文化の典型が※人文・芸術である。まず人文・芸術がいかに人間にとって根源的なものであるかについて示しておこう。人類は太古の昔から人文・芸術の原型となる活動を自らの楽しみ・喜びのために行って来た。

例えば絵画で言えば「ラスコーの壁画」は約2万年前にクロマニヨン人によってフランスのラスコー洞窟に描かれたシカやウシの絵で、絵画の原点として有名である。雨で狩りができない日に洞窟で雨をしのぎながら、獲物に思いを馳せながら描いたのではないかと言われている。躍動感溢れる野生動物の活き活きとした姿を描き出した描写力は現代でも芸術の域に達していると評価されるほどである。

音楽も太古の昔から人々の暮らしとともにあった。文字を持たない民族は存在するが、音楽を持たない民族は存在しないと言われているほど、音楽は人間にとって根源的に必要とされるものである。音階とリズムは人間に心の高揚と独特の情緒を与えてくれる。そうした高揚や情緒を味わい楽しむために、どの民族も太古から生活の中に音楽があった。

身体的なパフォーマンスである踊りやダンスも人間にとって根源的な営みである。人は嬉しいことがあつて踊り、闘いに臨んで踊り、神に祈って踊る。音楽やリズムに乗せて体を使って踊ることは、人に高揚感をもたらせてくれたり、仲間との紐帯を強め集団の関係を築いてくれたりと、人間が生きていく上で自然で重要な営みである。このように芸術は人間の存在に根源的に結びついて人間を人間たらしめている必要不可欠な営みなのである。

こうした文化・芸術に発展していく他に、もう一つ遊びから生まれて来る人間にとって根源的な楽しみ／喜びがある。「交流」である。

人間は群れの動物である。狩りをするのも集団で行うし、田植えや収穫も集団で行う。その方が生産性が高く、収穫量が増し、生存確率が高まるからである。ただし、群れで活動するのはそうした生産的活動だけではない。遊びにおいても、他者や仲間との交流を伴うものが多い。交流を伴うママゴトや鬼ごっこといった集団での遊びも、囲碁や将棋といったゲームも、②フックスウ人で楽しむ遊びの方が一人遊びよりも種類が多い。そればかりか、一人でも可能な俳句の創作や一人でも踊れるダンスでも、同好の士が集まって句会をやったりフォークダンスや集団舞踊として集団で楽しむことが多い。

集団で遊ぶことが多いのは、そこに交流を伴うからである。人間にとって交流はそれ自体が楽しく幸せなものなのである。その意味において、究極の遊びは「おしゃべり」だと言えるかもしれない。ソクラテスも「人間にとって最大の楽しみは会話である」と語ったとされているが、究極の遊びの楽しさの本質は人との交流にあるのである。

このように、人間が余裕のエネルギーと時間を、生きていくためには必ずしも必要ではない遊びと文化・芸術や交流に③ソソギ込んで来たこと

こそが人間らしさの本質であり、そうした文化と交流の集積が  
泉になっている。

1

以外の豊かき、つまり人間にとって根源的な楽しみや喜びの源

こうした文化や交流に繋がっていくような遊びこそが人間の人間たる所以であるというのが、ホイジンガによる「ホモ・ルーデンス」としての人間の定義であるが、新しい大きな物語を描く上で回帰すべき人間のあり得べき姿として大いに参考にすることができよう。

(波頭亮『文学部の逆襲——人文知が紡ぎ出す人類の「大きな物語」』より)

※享受……受け取って自分のものにする事。

※ポテンシャル……潜在する能力。

※喝破……堂々と論じて真理を明らかにすること。

※普遍性……すべてに広くあてはまる事。

※アンチテーゼ……ある考えや立場に対し、それに反対する立場。

※本章の冒頭……本文以前の箇所を指す。

※所以……理由。根拠。わけ。

※人文……人類が創り出した文化・文明。

問一 —— 線①③のカタカナを漢字に直さない。漢字は一画ずつていねいに書くこと。

問二

——線(1)「現代の大きな物語を考える」とありますが、「現代」に新たな「大きな物語」が必要とされているのは、人々の生活がどのように変わっていくからですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今後起きる産業革命によって無限の物理的エネルギーを獲得できるようになり、合理的な財の再分配が機能すれば、人々は働かなくても現在と同じような生活を送れるようになるから。

イ 多くの知的作業がAIに代替され、合理的な財の再分配が行われることで、人々はほとんど労働しなくても生活することが可能となり、より幸福な人生を送ることができるようになるから。

ウ 圧倒的な生産力を持つAIが資本に替わって神のような存在となり、AIによって産出された財を合理的に再分配する仕組みさえ整えれば、人々は生きるための労働から解放されるようになるから。

エ AIの発達によって知的な仕事の大半から解放されて生きがいとしての仕事を失うものの、産出された財を合理的に再分配できれば、人々は現在と同程度の生活水準を享受できるようになるから。

オ AIの発達によって膨大な情報処理業務から解放され、AIに生み出された利益を合理的に再分配する制度を確立すれば、人間は現在の生活水準を維持しながら自由な時間を得られるようになるから。

問三

——線(2)「アリストテレスの教えが一つの参考になろう」とありますが、「アリストテレスの教え」が「現代の大きな物語」を考える上で参考になるのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かつてとは異なり人々が利益のための行為ばかりをするようになってしまった現代では、人々の営為を目的と手段に分け、人間が幸福を得るための行為を提示したアリストテレスの教えは非常に有益だから。

イ AIが発達するこれからの時代の人々は、奴隷労働に支えられた古代ギリシアの市民と同じように、生存のための労働から解放されるはずであり、そうした人々に対して、アリストテレスの教えは幸せに生きるための方法を提示してくれるから。

ウ アリストテレスは奴隷労働のあった古代ギリシアで人間の幸福を追究し、真善美を生み出す行為を提示したが、真善美を生み出す行為の価値は普遍的であり、たとえ知的な労働から解放された状態であっても人々に幸福感を与えるから。

エ AIが発達する現代は、アリストテレスが生きた古代ギリシアと同様に人々が人間らしく生きている時代であり、労働とは異なる行為の

価値を唱えるアリストテレスの教えの前提条件を古代ギリシアと共有しているから。

オ 奴隷労働により人々が生きるための労働から解放されるという点で、アリストテレスの生きた古代ギリシアの生活と現代社会で享受する生活は共通しており、アリストテレスの教えは現代にも適用できるから。

問四 ——— 線(3)「エウダイモニア(幸福の行為)」とありますが、その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 活動自体を手段ではなく目的として、真実を明らかにし、人や世の中をより良くするよう行動し、美しい作品を創出することで、自分の存在価値を世に知らしめること。

イ 日々の生を営むこと自体を目的として、真理を突き詰めて考え、自分以外の人や世界を助けるために行い、美しいものを創り出すことで、自己充足感や幸福感を得ること。

ウ 何かを得ることを目的とするのではなく、活動自体を究極の目的として、世界の道理を明らかにし、善なる行いを積み、美しい芸術を創りながら他者と交流することで、幸せな人生を送ること。

エ 何かの手段としてではなく活動を行うこと自体を目指して、真理を究明したり、他者のために働きかけたり、美しいものを生み出したりすることで、喜びや尊敬を得ること。

オ 奴隷の労働力を利用し、生きるための労働から解放された上で、活動自体を手段ではなく目的として、真実を追究し、人々の善行を享受し、美的創作を行うことで、豊かに生活すること。

問五 ——— 線(4)「第二のルネサンス的な人間性を尊重した価値観が求められることになろう」とありますが、現代において「人間性を尊重した価値観が求められる」と考えられるのはなぜですか。ルネサンス期の状況にふれながら、五十一字以上六十字以内で説明しなさい。

問六——線⑤「ホモ・ルーデンス」とありますが、これを動物と比較しながら説明したものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 基本的に単独で行動する動物に対し、ホモ・ルーデンスである人間は、生産的活動においてだけでなく自身にとって本質的である遊びにおいても、他者や仲間との交流を伴うことで効率性や生存確率を高めており、交流を楽しく幸せに感じる存在である。

イ 狩りのための身体形成と技術習得に向けた手段として遊びを生涯にわたって行う数種類の動物に対し、ホモ・ルーデンスである人間は、目的としての遊びを幼児期にのみ行っており、自身にとって本質的である遊びを通して精神的に成熟する存在である。

ウ 餌を捕るための活動と繁殖するための活動以外は基本的に何もしない動物に対し、ホモ・ルーデンスである人間は、自らの楽しみや喜びのために芸術の原型となる活動を行っており、芸術抜きには人間らしく生きられない存在である。

エ 無駄なエネルギーを使うと生き延びる確率を減らしてしまうため、生存に必要な活動しか行わない動物に対し、ホモ・ルーデンスである人間は、生きるための労働から解放されており、成人しても自身にとって本質的である遊びを楽しむことができる存在である。

オ 生存には必ずしも必要ではない遊びを楽しむ動物に対し、ホモ・ルーデンスである人間は、生存に必要な不可欠な遊びを、持ち前の知性を發揮して賢く工夫して行うことで、根源的な楽しみや喜びを手に入れることができる存在である。

問七

1

に入る表現として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 精神的価値や知性

イ 芸術的価値や創造性

ウ 経済的価値や普遍性

エ 物質的価値や利便性

オ 歴史的価値や生産性

問八

本文では、現代の「新しい大きな物語」を構想する上で「人間らしき」について説明しています。ここで述べられている「人間らしい」生き方とはどのような生き方ですか。本文全体をふまえて、五十一字以上六十字以内で説明しなさい。



240510

令和六年度

国語解答用紙

渋谷教育学園渋谷中学校

※らんには記入しないこと

↓ここにシールを貼ってください↓

|         |  |  |   |   |
|---------|--|--|---|---|
| 受 験 番 号 |  |  |   |   |
|         |  |  |   | 番 |
| 氏       |  |  | 名 |   |
|         |  |  |   |   |

|      |   |
|------|---|
| 合計得点 | ※ |
|------|---|

|    |
|----|
| —  |
| 問一 |
| ①  |
| く  |
| ②  |
| びて |
| ③  |
| める |
| ④  |

[illegible]

|    |    |
|----|----|
| 問六 | 問三 |
| 問七 | 問四 |
| 問八 | 問五 |

|    |
|----|
| 二  |
| 問一 |
| ①  |
|    |
| ②  |
|    |
| ③  |
|    |
| ぎ  |

|    |  |
|----|--|
| 問二 |  |
| 問三 |  |
| 問四 |  |

[illegible]

|    |  |
|----|--|
| 問六 |  |
| 問七 |  |

[illegible]

303

5

✕

3

3